

令和8年度 文京区議会建設委員会 視察報告書



札幌市モエレ沼公園 ガラスのピラミッド「HIDAMARI」前にて

視察概要

1 視察日程

令和8年7月13日（月）～15日（水）

2 視察先及び目的

(1) 北海道北広島市

「ボールパーク構想推進事業」に関する調査・研究

(2) 王子グリーンエナジー江別株式会社江別発電所

「再生可能資源を活用したバイオマス発電」に関する調査・研究

(3) 北海道江別市

「地球温暖化施策」に関する調査・研究

(4) 北海道札幌市モエレ沼公園

「マスタープラン策定の経緯及び自然環境保全の取組」に関する調査・研究

3 視察参加者

委員長 松 平 雄一郎

副委員長 品 田 ひでこ

理 事 依 田 翼

理 事 浅 川 のぼる

理 事 豪 一

理 事 宮 本 伸 一

理 事 高 山 泰 三

理 事 板 倉 美千代

同 行 高 橋 彬 （土木部みどり公園課長）

随 行 佐久間 康 一 （区議会事務局長）

随 行 眞 鍋 由起子 （区議会事務局議事調査担当）

「ボールパーク構想推進事業」に関する調査・研究

1 視察先名称

北海道北広島市

2 視察日時

令和8年7月13日（月）14時00分～15時30分

3 視察目的

「ボールパーク構想推進事業」に関する調査・研究

プロ野球スタジアムの誘致に成功した北海道北広島市のまちづくり、地域活性化戦略を視察し、同様にプロ野球スタジアムのある文京区の取組の参考とする。

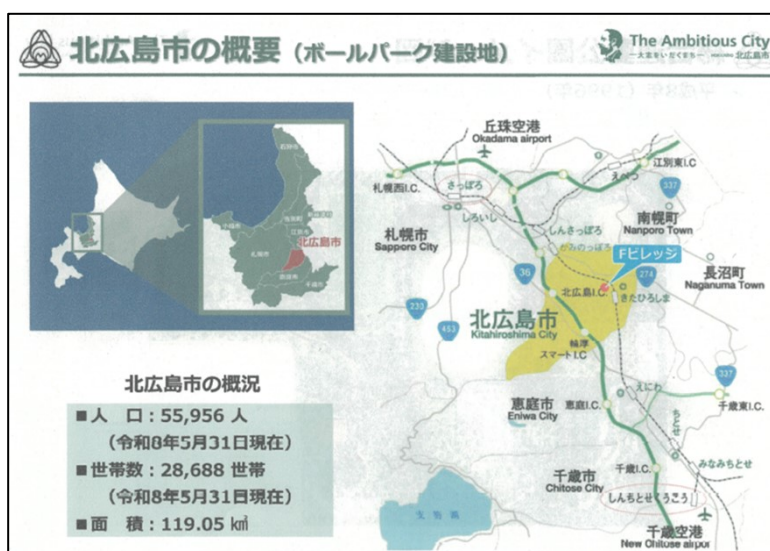
4 視察先対応者

北広島市ボールパーク連携推進課

5 視察先概要

北広島市の概要：人口 55,882 人、28,694 世帯（令和8年7月31日現在）、総面積 119.05 km²

北広島市は札幌・新千歳空港間に位置し、豊かな緑の環境、ゆとりある土地空間、整備された交通網など自然と都市機能が調和したまち。明治 17 年に広島県人が集団移住し、開拓されたことが地名の由来となった。クラーク博士が「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の名言を残したゆかりの地。



北広島市の概要(資料より)



「旧島松駅」の敷地内にある、クラーク博士が「Boys, be ambitious.」の言葉を残して旅立った別れの地を記念するクラーク記念碑(画像:市HPより)

6 視察内容

ボールパーク構想推進事業は、北海道日本ハムファイターズのホーム球場となったエスコンフィールド HOKKAIDO を中心とする 32ha（北海道ボールパーク F ビレッジ）を開発する同市にとっての一大プロジェクトである。市による球団誘致の表明が 2016 年 6 月にされ、2018 年 3 月に予定地に内定した。その後 2020 年 4 月に球場を着工、2023 年 1 月に竣工し、3 月からプロ野球の試合を実施している。



きたひろしま総合運動公園予定地約 32ha（資料より）



エスコンフィールド HOKKAIDO Coca-Cola Gate

市が総合運動公園の予定地として確保しつつも事業が進まなかった土地を球団側に賃貸し、球団は、球団と球場の一体経営という長年の夢を実現した。敷地内は温浴施設、レストラン街、住居、医療施設、認定こども園、農業学習施設、子どもの遊び場やキャンプ施設など様々な施設が集積している。市は誘致に奔走したものの、基本的には民間事業である。市は屋外広告の規制緩和や鉄道新駅の請願、費用負担による建設推進、周辺のまちづくりなどを推進している。

来場者が 2023 年 346 万人、2024 年 419 万人、2025 年 459 万人と順調に増加しており、市への経済効果は年間 500 億円超（民間調査会社の試算）に及ぶという。

今後の課題としては J R 北広島駅から 1 km ほど札幌方面へ進んだ場所に作られる新駅と周辺の整備である。新駅は F ビレッジの目と鼻の先になるため、新駅が開業すればそちらが施設への玄関口となる。既存の北広島駅周辺の再開発とあわせて大きな計画となるが、交流人口の増加を生かして野球のみにとどまらないまちづくりが求められている。



ボールパーク構想について説明を受ける様子



北広島市役所にて

「再生可能資源を活用したバイオマス発電」に関する調査・研究

1 視察先名称

王子グリーンエナジー江別株式会社江別発電所

2 視察日時

令和8年7月14日（火）10時00分～11時30分

3 視察目的

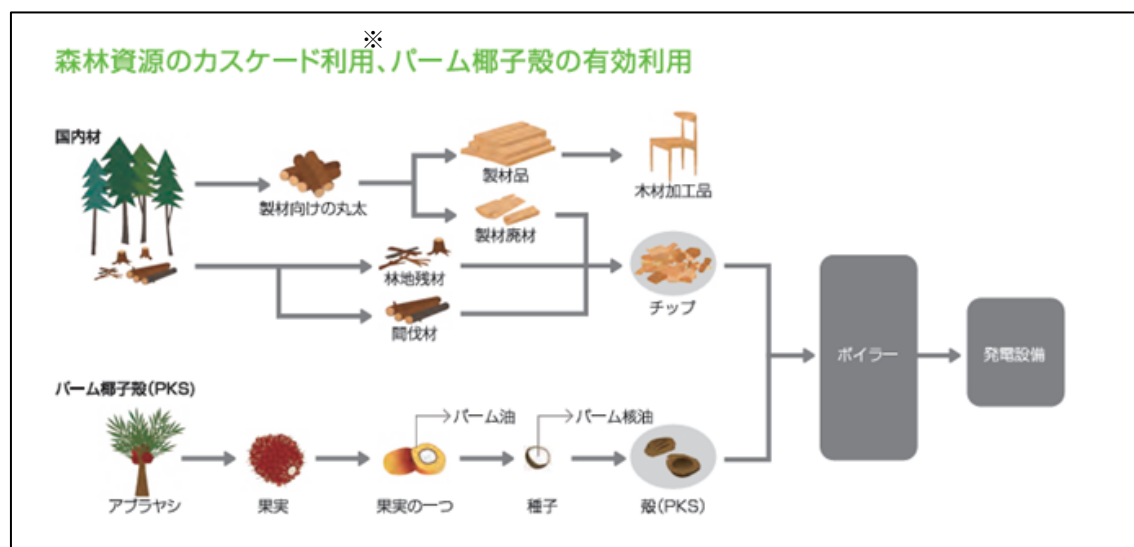
「再生可能資源を活用したバイオマス発電」に関する調査・研究

4 視察先対応者

王子グリーンエナジー江別株式会社江別発電所

5 視察内容

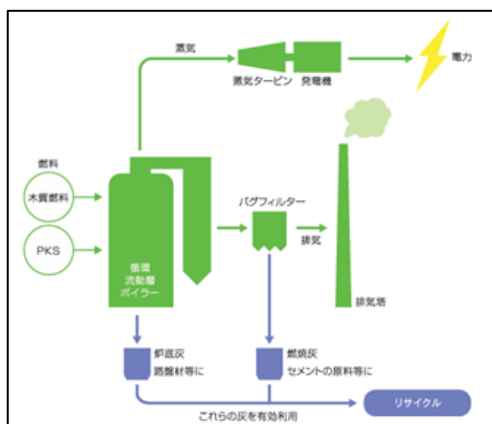
王子グリーンエナジー江別は、再生可能な資源を有効活用したバイオマス発電を通じ、人と環境の持続可能な社会の実現を目指している。バイオマスとは、動植物由来の有機性資源のうち石油や石炭などの化石資源を除いたもののことで、太陽光や風力、水力などと同じ再生可能エネルギー源の一つである。バイオマス発電では、山林の残材や間伐材、製材廃材、パーム椰子殻（PKS）など、これまで用途のなかった廃棄物を燃料として有効活用することができる。安定的に発電量が見込める点でも今後の活用が期待されている。



燃料調達の図（パンフレットより）

※カスケード利用：資源などを付加価値の高い用途を優先しながら、段階的に余すことなく利用すること。

なお、発電規模は年間約 1.8 億 kWh で、一般家庭約 6 万世帯分の電気を供給している。環境にやさしい木質燃料等を利用してボイラーで蒸気を作り、その力でタービンを回転させ、発電機で発電する。使用する木質燃料は年間約 20 万トンに上る。燃焼の際の排気に含まれる燃焼灰はバグフィルターにより大部分が除去され、ボイラーの底に残った炉底灰とともに、セメントの原料等や路盤材等に有効利用している。このように発電所はバイオマス発電を通じて資源循環型社会の実現を目指し、森林の育成と関連産業の振興による地域活性化に貢献している。



発電の仕組み（パンフレットより）



チップヤード（木質燃料の燃料チップを保管するスペース）

王子グリーンエネルギー江別は、林野庁の森林経営計画に基づいて伐出される間伐材・林地残材などの「未利用材」や、製材廃材・木の皮（バーク）・パーム椰子殻（PKS）などを燃料にバイオマス発電を行っている。中でも間伐は活力ある森林を維持するために必要な作業で、その間伐材を有効に活用することは、森林保全と資源活用の両面で意義がある。なお、王子グループ全体としてバイオマス発電規模は、714,000 トンの CO2 削減につながっていると発表している。

※なお、樹木が成長する際に取り込む CO2 と、発電の際にチップを燃焼して排出される CO2 の量は等しいと考えられ、これをカーボンニュートラルと言う。そのため、バイオマス発電で温室効果ガスの量は変化しないとされている。



カーボンニュートラルについて（パンフレットより）

6 質疑応答

Q： 「バイオマス発電」は、カーボンニュートラルに貢献する再生可能エネルギーの一つとして注目されている。バイオマス発電では石炭や石油などの化石燃料ではなく、生物由来の燃料を活用して発電する。主なメリットは、「CO2 排出量の抑制につながる」、「電力を安定供給しやすい」「資源をリサイクルできる」「エネルギーの地産地消による地域活性化につながる」とされている。一方、木質バイオマス発電のエネルギー変換効率は約 30%とされており、他の再生可能エネルギーと比較してエネルギー変換効率が低い点がデメリットである。そのほか「原料の調達にコストがかかる」「原料の安定確保に課題がある」の指摘もあるが、変換効率アップやデメリット解決に向けてどのように努力されているか。

A： 当社バイオマス発電は、使用バイオマス燃料のライフサイクル GHG の自主評価を行い開示することで、化石燃料発電に比べライフサイクル全体の GHG 排出量が十分に低いことを確認している。また、王子グループが保有しているインフラの有効活用や発電設備の操業技術に加え、木材チップの燃料集荷のノウハウを利用し、燃料の安定確保ができているため、電力の安定供給が可能。

Q： ライフサイクル GHG とは、製品やサービスが生産から廃棄までの全過程において排出される温室効果ガスの総量を指し、バイオマス燃料は燃焼時に CO2 が排出されるが、燃料となる植物が成長時に吸収した CO2 と相殺されるため、カーボンニュートラルと見なされている。しかし、ライフサイクル全体でみると、栽培時の肥料や農業機械の使用、燃料の加工や輸送で化石燃料が使われる場合があり、それらも GHG 排出源となってしまう。そのため、バイオマス燃料が本当に低炭素であるかどうかを判断するには、ライフサイクル全体での GHG 排出量を評価することが不可欠となる。こちらのバイオマス発電において化石燃料発電に比べ、ライフサイクル全体の GHG 排出量が十分に低いことを確認しているとあるが、数値として考えた場合はどのように受け止めればよいのか。

A： 化石燃料として CO2 180 g の排出に対して 70%カットで 54g の排出を目指し、ライフサイクル全体での GHG 排出量が十分に低いと確認している。

Q： 製紙業界として、古くからバイオマス発電に取り組んでいると思うが、どの製紙会社も同様なのか。

A： 製紙会社では昔から（製紙に必要な）パルプを作る時にでる「端材」等を活用して、工場の電力を賄うためにバイオマス発電を実施してきた。パルプを製造するどの製紙会社も同様と思われる。

Q： 環境汚染への対応はどのようになっているか。

A： 発電工程の中に「バグフィルター」があり、ボイラーの排気中の燃焼灰を除去し、排気することで、環境汚染対策をとっている。

Q： 発電した電気は自社工場で活用する以外はどのようになっているのか。

A： 発電した電気は、王子の関連会社である王子伊藤忠エネクスに販売し、そこ

から各ユーザー様へ販売をしている。

Q： 地域住民との交流などあるか。

A： 江別市とは常に連携している。また、学生等の工場見学なども受け入れている。



バイオマス発電所の前で



木質燃料ヤードの前で

「地球温暖化施策」に関する調査・研究

1 視察先名称

北海道江別市

2 視察日時

令和8年7月14日（火）14時00分～15時30分

3 視察目的

「地球温暖化施策」に関する調査・研究

4 視察先対応者

江別市生活環境部環境室環境課脱炭素・環境計画推進担当

5 視察先概要

江別市の概要：人口 117,624 人、60,375 世帯（令和8年8月1日現在）、総面積 187.38 km²

■都市と自然が調和する街

北海道石狩平野の中央に位置し、全体に平坦な地形で、鉄道は5つのJR駅がある。充実した道路網により道内の主要都市と結ばれており、北海道の空・海の玄関口である新千歳空港や石狩湾新港にも近く、恵まれた立地条件の街。市内には日本三大河川の一つ石狩川が流れ、2,053haの「野幌森林公園」があるなど、自然環境に恵まれた街。

■産業 ～多彩な農業を展開、工業施設・技術の集積～

農業：稲作、畑作（小麦）作付面積 1,660ha※2024 年

畜産（乳用牛）飼育頭数 4,539 頭※2024 年、酪農、施設園芸など。

工業（製造業）：食料品 29 事業所、パルプ/紙/紙加工品 5 事業所、鉄鋼業 4 事業所
※すべて 2025 年

■教育・研究機関 ～「研究学園都市」生涯学習の充実・地域産業との連携～

大規模研究施設のほか4大学1短大が立地する。市民向けの公開講座やセミナーの開催による生涯学習の充実、また産学官連携により地域の課題解決、地域活性化、一次産品を用いた地域ブランドの開発などに取り組む。



えべつ観光特使「えべチュン」

札幌のとなりに住んでいる、頭がレンガのレンガ鳥。
いつも江別産小麦のハルユタカを持っていて、
感動の涙を流している。
好きな食べ物はもちろん江別産小麦。
（説明：えべつ観光協会HPより）



画像：市 HP より

6 視察内容

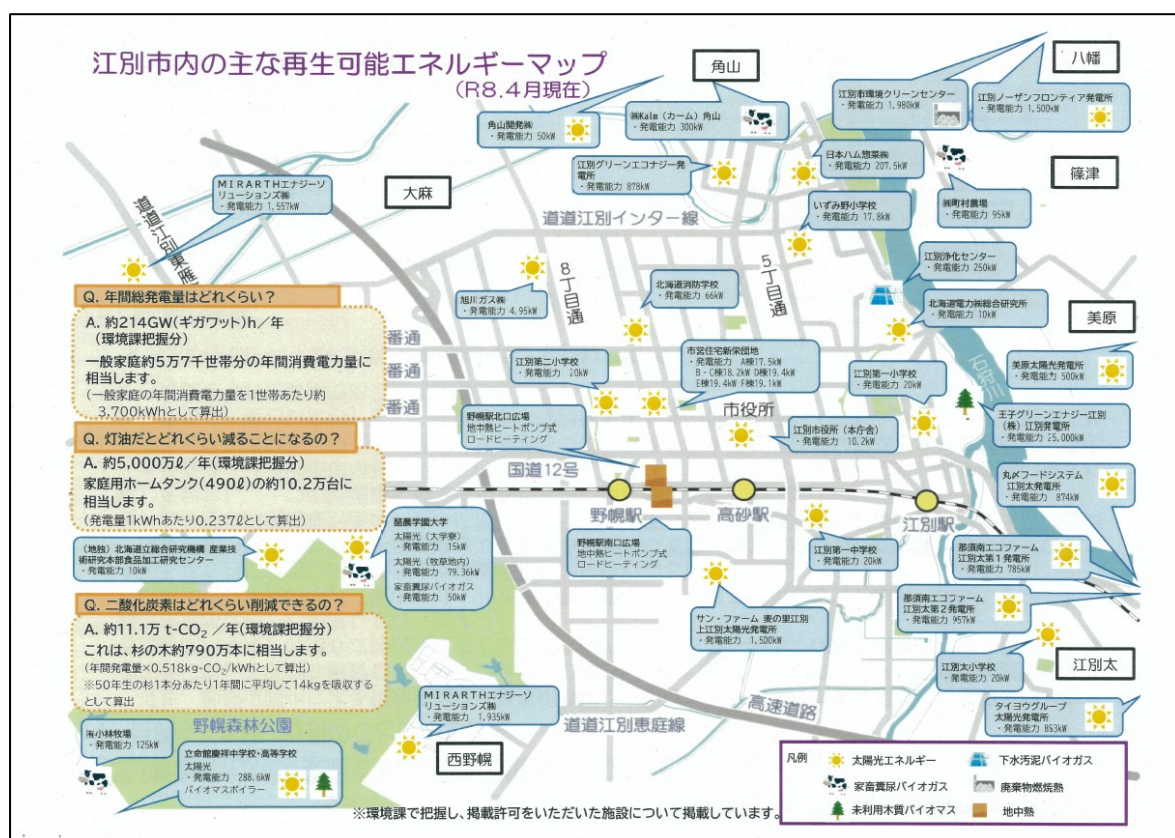
(1) 地球温暖化対策実行計画（区域施策編）について

ア 市長のことばより（抜粋の抜粋）

“近年、地球温暖化による気候変動は、暴風雨や洪水、干ばつなどの異常気象につながり、生態系や私たちの生活に対して深刻な影響を及ぼしています。2021年に公表されたIPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第6次報告書では、「人間の影響が大気、海洋、陸域を温暖化させてきたことは疑う余地がない」と明言しております。

このような状況の中、江別市では、2050年の脱炭素社会の実現を目指して「ゼロカーボンシティ」を令和5年6月に宣言し、地域から地球温暖化防止に挑むこととしました。”

イ 江別市内の主な再生可能エネルギーマップ



(資料より)

(2) 再生可能エネルギーの導入状況

ア 大規模太陽光発電「江別ノーザンフロンティア発電所」

江別市環境クリーンセンターの敷地内、約38,000㎡に約1万枚の太陽光パネルが設置されており、再エネの普及を促進するとともに、体験型環境学習の場として活用している。



画像：資料より

イ 太陽光発電（市内各所）

公共施設等への太陽光発電の導入を進めている。

例 1：江別第二小学校屋上

平成 26 年度～27 年度に改修工事を行った小・中学校の屋上へ太陽光パネルを設置。



江別第二小学校：資料より

例 2：酪農学園大学

令和 5 年度より、北海道自然電力(株) の協力により「垂直型両面太陽光パネル」を設置しソーラーシェアリングの実証実験を開始。



酪農学園大学：資料より

ウ 地中熱ヒートポンプ 野幌駅前広場のロードヒーティング

中心市街地に位置する野幌駅の駅前広場では、地中熱ヒートポンプ式ロードヒーティングを導入している（当時、北海道内初）。シーズン中 12～3 月の 4 か月間稼働で、野幌駅北口前広場の平成 26 年からの稼働実績では、市の道路の電熱式ヒーティングと比較して、当時は電気料金が約 3 分の 1 であった。

エ 消化ガスコージェネレーション「江別浄化センター」

江別浄化センターで発生する消化ガスについて、施設内の加温用ボイラーに用いた余剰分を利用して、コージェネレーション発電機により電気と熱を回収している。

1 時間当たり発電機出力は 250kW で、浄化センター内で使用する電気を賄っている。（平成 27 年度実績で年間電気使用量の約 26%）なお、汚泥処理施設から排出された脱水ケーキは肥料として農地に還元され、ほぼ 100%有効利用されている。

オ 畜産バイオガスプラント

市内では 4,500 頭を超える牛乳用の牛が飼養されており、大規模経営体 4 か所で畜産バイオガスプラントが導入され稼働している。

・町村農場バイオガマプラント

平成 12 年稼働開始、発電設備の出力 95kW



町村農場バイオガスプラント（資料より）

カ 木質バイオマス発電所

平成 28 年 9 月から、市内で稼働している木質バイオマス発電所が発電する電力を販売する電力販売会社からの電力の購入を行っている。

・王子グリーンエナジー江別株式会社 江別発電所

間伐材由来の木質バイオマス

発電機の出力 25,400kW



王子グリーンエナジー江別株式会社
江別発電所（資料より）

(3) 今後の課題と問題点

- ・ 地元で発電されている再生可能エネルギーのすべての電力量について、一般家庭で換算した場合に約6～7万世帯相当の電力量があるが、ほとんど電力会社へ流れている。その一方で、2050年のゼロカーボンシティに向けて、江別市で持っているポテンシャルを最大限に活かした再生可能エネルギー設備の導入と、地元でつくった電気を地元で消費すること（地産地消）が課題。
- ・ 北海道胆振東部地震におけるブラックアウトの教訓を生かし、独立電源が重要。避難所の安全性や利便性を確保するために、避難所の独立電源システムの確立が課題。



環境政策について説明を受ける様子



江別市役所前にて

7 質疑応答

Q： 地産地消が進まないという原因は。

A： 太陽光パネルを設置した時代は買ってくれる値段が高かった。それで自家消費にならなかった。最近電気料金が非常に安くなったので自家消費がよいとなればと言われている。

江別市役所本庁舎に設置した太陽光パネルは一般家庭3世帯/年相当の電力が、またいずみ野小学校のパネルでは一般家庭5世帯/年得られている。

Q： 太陽光パネル設置について、傾斜ではなく垂直にしている理由は。

A： 酪農学園大学の牧草地で垂直型両面パネルを設置して実証実験を行っている。垂直にすることで両面を使うことができる。大型農業機械による作業が必要な農業にも導入できる。雪が積もりにくく、夏と同じくらいの発電量がある。積雪地域でも冬場の発電量を維持できる。壁面につけているところも結構ある。今後は、暴風雪柵やシカ除け柵にならないか検討している。

Q： 環境学習（主に脱炭素に関する啓発事業）について

A： 将来を担う若い世代に対し、地球温暖化対策を「他人事でなく、自分事」のように考えてもらいたいと考えている。令和7年度の高校生に向けた出前・脱炭素セミナーでは、市内3校で596名に対し実施。講師は、市内の酪農学園大学の教授の方。

Q： 家庭向け脱炭素化普及促進事業補助金の実績は。

A： 令和6年度から実施し、予算上限は毎年1,000万円。

対象設備と補助金額は以下のとおり。

・太陽光パネルと定置用蓄電池の両方設置 1件20万円 …(1)

・太陽光パネルと定置用蓄電池のいずれか設置 1件10万円 …(2)

(1)は令和6年度39件、令和7年度36件、令和8年度40件

(2)は令和6年度22件、令和7年度28件、

令和8年度パネル1件、蓄電池19件

いずれも応募締め切りまで1か月で終了だったが、今年は1週間たたず上
現の1,000万円に達し応募締め切りとなり、非常に人気のメニューとなっ
ている。

「マスタープラン策定の経緯及び自然環境保全の取組」 に関する調査・研究

1 視察先名称

北海道札幌市モエレ沼公園

2 視察日時

令和8年7月15日（水）10時00分～11時00分

3 視察目的

「マスタープラン策定の経緯及び自然環境保全の取組」に関する調査・研究

4 視察先対応者

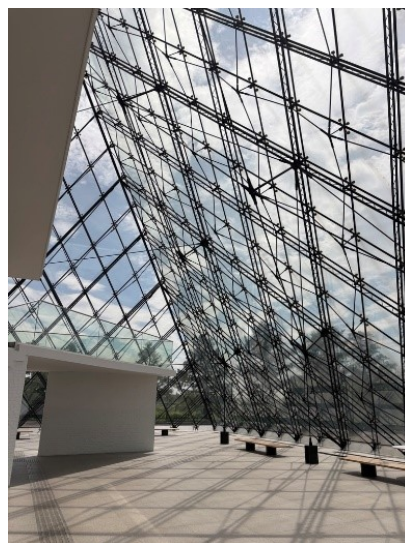
公益財団法人札幌市公園緑化協会（札幌市指定管理者）

5 視察内容

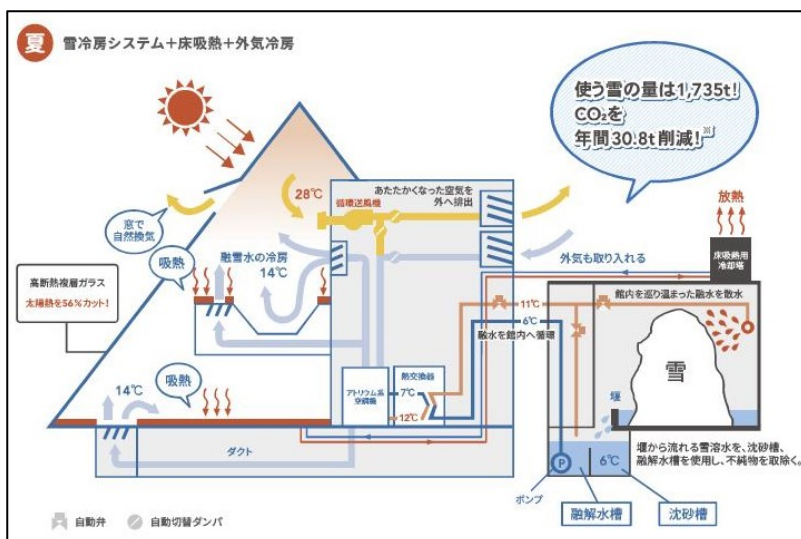
ごみ埋立地という負の遺産を、世界的な彫刻アートスポットへと昇華させた。これにより、国内外からの観光客誘致や地域のイメージ向上に大きく貢献している公園である。また、ガラスのピラミッドに導入された雪冷熱エネルギーの活用など、環境配慮の先駆的なモデルとしても高く評価されている。



公園整備について説明を受ける様子



ガラスのピラミッドの内部



ガラスのピラミッドの雪・風・太陽を利用した空調の図（パンフレットより）



雪冷房システムに活用する雪貯蔵倉庫前を見学

（１）今後の期待

今後も、札幌国際芸術祭などの地域イベントや観光プロモーションと連動した、国内外への文化芸術発信の核としての役割が期待されている。市民や民間と連携した持続可能な管理体制を構築し、世界的な文化的価値を次世代へ継承していくことが望まれる。

（２）課題

189ヘクタールに及ぶ広大な敷地と、独自の彫刻的建造物を維持するための老朽化対策や、修繕・管理コストの増大が深刻な課題だと言う。また、市街地中心部からのアクセス改善や、積雪の多い冬期における園内施設の有効活用などは現在モエレ山のソリ遊びなどで工夫しているが大きな収入にはならない。

公園内は市の施設であるがイサム・ノグチの彫刻作品に関しては著作権の関係で市では自由に管理できないのが歯がゆいところで、彫刻家イサム・ノグチの作品を取り扱う財団法人との修繕に関する交渉も簡単ではない。

(3) 費用対効果

国内外から多くの観光客を誘致し昨年は 88 万人の来場者、外国人は約 20%を占め、アジアからの観光客が多いという。地域のブランド価値を高める経済効果は絶大であるが、特殊な建造物の修繕や広大な芝生の維持、雪冷却システムのメンテナンスには膨大な経費が伴い、投資対効果の最適化が大きな課題である。市からの歳入予算は 1 億 7,000 万円、収入 6,000 万円の合計 2 億 3,000 万円での運営という予算の低さには驚いた。さらに、ゴミ埋め立て地特有の地盤沈下対策も継続的な負担となっていくという。

今後は民間活力の導入やイベント収益の拡大など、財政負担を減らす具体的な財源確保の策が検討されるべきではないか。

(4) まとめ

素晴らしい彫刻アートの公園であるが、今後の歴史的芸術的価値を維持することに困難を感じた。公園の有償化等収入増を図り、施設の修繕や地盤沈下などの維持費に充てたいところである。北海道らしい広大で伸び伸びした公園で居心地の良さを体感できた。

7 質疑応答

Q： 管理運営と予算について。

A： 札幌市の外郭団体が指定管理で運営している。運営経費は年間約 2 億 3,000 万円。収入は約 1 億 7,000 万円が札幌市からの指定管理者料。その他、利用料収入が約 2,000 万円、収益事業が約 4,000 万円となっている。運営上は雪溶け後の清掃や補修が特に大変である。なお、昨年より野球場が硬式野球になったので別途運営となっている。

Q： イサム・ノグチの作品の修繕はどうしているか。

A： 非常に難しい。公園全体を市の施設として管理しており、全体を「作品」として管理するのが難しい。本来は文化財として管理すべきところだが、一般的な公園としてのみの修繕となってしまっている。また、当園は埋立場の跡地にあるため、実は地盤がとても弱く、地盤が 60cm 下がった箇所もある。特に 126 機ある遊具の老朽化が課題である。平成 30 年の北海道胆振東部地震でも一部損壊した。遊具の安全基準が竣工当時と変わってきているものの、イサム・ノグチの作品であるため著作権の課題もあり財団と調整が困難で止まっているものも多い。

Q： 世界からのお客さまはどう集めてるのか、その特徴などあるか。

A： 韓国、台湾、フィリピンのお客さまが多い。SNS や口コミサイトを見て集まっている模様である。建築好き、写真好き、ウェディングフォトなどさまざまなニーズがある。特にアジア圏では雪景色が貴重らしい。また、モエレ山のソリ滑りも人気である。

Q： ごみ処分場跡地であるが土壌汚染はどうなっているのか。

A： ガス抜き管があちこちにある。また、水処理場もまだ稼働してモニタリング中である。

視察を終えて

松平 雄一郎 委員長



北広島市、江別市、札幌市の3自治体にある各施設を訪問し、まちづくりや地球温暖化対策、公園整備など、建設委員会として議論する幅広いテーマについて視察をさせて頂いた。

北広島市では、官民連携によるボールパーク整備とまちづくりについて学ぶため、全国的に注目を集める北海道ボールパークドビレッジを訪問。地元自治体とファイターズが連携して事業を拡大・充実させ、年間500億円を超える経済効果や税収の増加、ふるさと納税額の向上など、北広島市の地域ブランド価値の向上につながっている点は評価できる。今後、新駅の整備も予定されており、さらなるまちづくりの進展に期待したい。

江別市では、間伐材や林地残材などを活用したバイオマス発電施設「王子グリーンエナジー江別発電所」を視察。燃料の安定確保に課題はあるものの、年間約6万世帯分の電気供給が可能となっている点は高く評価できる。民間企業と連携した多様な再生可能エネルギー導入の取り組みは、本区においても参考になると感じた。

札幌市では、東区にある「モエレ沼公園」を視察。指定管理者より、自然環境保全や公園のコンセプト、モニュメントの維持管理における課題について説明を受けた。モニュメントの老朽化については、イサム・ノグチの芸術的価値と安全性を両立した改修を行うため、財団や自治体との交渉・手続きに大きなハードルがあると感じた。芸術的価値を未来につなげながら、安心・安全な総合公園を維持する在り方について理解を深めることができた。

今回の視察を快く受け入れて頂いた3自治体の関係者の皆様に、心から感謝を申し上げます。有り難う御座いました。

「官民連携」のまちづくりと環境への取り組み

品田 ひでこ 副委員長



北広島市は、本来の「総合運動公園予定地（32h）」を提供することでファイターズ新球場建設の誘致に成功し、令和5年3月末開幕に合わせ、スタジアムを中心に商業施設、子どもや市民のための施設やアクティビティを展開し、官民連携のまちづくりを5年で完成させるスピード感とスケールの大きさに驚愕しました。新たなまちづくりのお手本となる成功例です。今後は新駅整備や大学誘致で市民満足度アップのエリアになることでしょう。

江別市では「王子グリーンエナジーバイオマス発電所」見学という貴重な経験と、後に江別市役所で、地球温暖化対策のヒアリングを受けました。「再生可能エネルギーの地産地消」を目標とする市は、環境学習や家庭向け太陽光発電・蓄電池設置の普及や啓発に積極的です。一方で寒冷地においても、近年の気候変動により公共施設や学校の冷房対策も進めざる得ない政策変更の説明でした。

札幌市「モエレ沼公園」は、彫刻家イサム・ノグチ氏のマスタープランに基づく魅力的な公園です。雪冷房システムなど環境への配慮や洪水対策も行う公園の指定管理者は、全体経費が年間2億3千万円の内、市委託料が1億7千万円と厳しい財源での運営を余儀なくされていました。ですから過去に視察した時より維持管理に苦勞されている様子が見られました。今後も市民に愛され、市民が楽しめる公園事業の工夫に期待します。

今回の視察は、官民連携による新時代のまちづくりや気候変動による環境政策への転換の取り組みでした。現地を訪れてこそ知り得る貴重な体験と学びでした。

建設委員会視察感想文

依田 翼



今回の視察でやはり最も印象的だったのは北広島市だ。話を伺っていて驚いたのは、行政職員の身軽さと臨機応変な対応である。広大な未利用地と交通の便という利点はあるものの、北広島市は人口5万6,000人の小さな市であり、ファイターズが本拠地を置いていた札幌市とは比べものにならない。その北広島市が札幌市内の代替地と争って球場の誘致に成功し、その後も極めて少人数の担当職員で球団側からのさまざまな要望に応えながらインフラ整備を進めてきたことに感銘を受けた。職員の方に聞くと、市長はスピードを重視して現場に意思決定権限をできる限り付与し、細かいことには口を出さ

ずに現場で決めてきたことを追認するというスタイルを取っていたそうである。こうした行政の動かし方も時には必要なのではないかなと考えさせられた。球場そのものの作りの良さは語り尽くされているところであるが、試合がない日でも見学が楽しめるようになっているのは特徴的で、我々が視察した日にも数多くの観光客が訪れていた。こうした球場は他に例がないと思うので、今後も注目していきたい。

建設委員会視察感想文

浅川 のぼる



北広島市の「ボールパーク構想推進事業」では、新球場（エスコンフィールド北海道）を核に商業施設や様々な理想のエリアを造り上げたボールパーク（Fビレッジ）を視察した。市は、既成概念にとらわれずチャレンジする企業側と向き合い構想を進め、野球に興味のない人でも楽しめる施設を整え、地域貢献では防災拠点の活用をはじめ、今後の周辺開発における官民連携参画には地域の強い一体感を感じた。

次に王子グリーンエナジーの「バイオマス発電」と江別市の「地球温暖化対策」を視察した。市は豊かな自然環境を次の若い世代に残すため、令和5年6月にゼロカーボンシティを宣言し、太陽光パネル設置や垂直型両面太陽光パネル設置等の実証実験を行い、バイオマス発電にも目を向けるなど、エネルギーの地産地消を推進していることが素晴らしいと感じた。

最後に札幌市モエレ沼公園の設計者であるイサム・ノグチ氏は、「人間が傷つけた土地をアートで再生する」、「公園全体がひとつの彫刻作品」と考え、周辺の環境や景観への調和をはかり、ダイナミックな地形造成を行った。ごみ処理場だったモエレ沼の水害対策をはじめ、様々な環境への配慮を推進した事業に感動した。それぞれの視察場所で、本区においても参考となる工夫が各所に見られた。

建設委員会視察報告

豪一



・王子グリーンエナジー

ゼロカーボンへの具体的取り組みを研究するための視察が江別市にある、王子グリーンエナジー江別(株)の視察となり、江別市での取り組みについても話を聞けることとなりました。バイオマス発電所を稼働し、再生可能エネルギー供給を担う王子グリーンエナジーでは環境性能を問われる前から製紙工程での廃材などを燃やし、電力を作っていた。石狩川の真横に配置した当工場では川の水を活用し水蒸気を蒸気タービンに送り発電する。現在の動力は火力で木材だけでは燃えにくいため石炭必須であるが現在は代用としてパームヤシを系列会社より調達しているという。費用対効果は円安の影響を受けている。

・江別市役所

江別市は2050年までにCO2排出量実質ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」を宣言し、市民・事業者・行政が一体となった計画推進や、市内の木質バイオマス発電を活用した再生可能エネルギーの地産地消、環境教育や補助金制度による脱炭素化を積極的に進めている。

地球温暖化施策の関連事業者として王子グリーンエナジー江別(株)バイオマス、えべつ地球温暖化対策地域協議会（「えべつ環境情報広場」の運営などを実施）、NPO法人えべつ協働ねっとわーく（環境教育の推進）。牧場・酪農業における取組として市内の牧場や都市型メガファーム（Kalm 角山など）では、牛のふん尿からメタン発酵技術を活用し、電気や熱エネルギーを生成するバイオガスプラントが稼働していて、この循環型農業により、温室効果ガスの削減と悪臭防止を両立させているという。次回視察を推奨された。

視察を終えて

宮本 伸一



北広島市「ボールパーク構想推進事業」について視察。北広島市のまちづくりとして、日本ハムファイターズの新球場誘致に名乗りをあげ、土地面積の広さなどが評価され、北広島市が選定された。日本ハムファイターズの「全ての面で既存の考えを超える」という壮大な企画力と実行力と北広島市のまちづくりの思いが合致し、さらなる取り組みにも構想を広げており、まちづくりのあり方として大変に参考になった。特に、「時代のニーズをとら

えながら企画を広げていく」というコンセプトは先進的である。

王子グリーンエネルギー江別を視察。火力発電の燃料に山林の残材などを活用して脱炭素の取り組みに寄与している。王子グループとしても事業の一つとしとしてなりたち、収益も得ているようだが、江別市や北海道との連携で拡充を目指した方が良いと感じた。民間事業者と行政の連携の重要性を学んだ。

江別市を訪問し、同市の脱炭素推進の取り組みについて視察。避難所に太陽光と蓄電池を設置したいという見解を示されていたが、大いに賛同した。垂直型の太陽光パネルがあるとのこと。新しい技術が活用されているので、区の取り組みにも生かしたい。

モエレ沼公園を視察。有名な彫刻家が基本設計を手がけ、公園が芸術作品になっており、地域住民にも大いに活用されて親しまれている。課題として、維持費が大きいことと、芸術作品であることにより、更新等に課題がある。観光客も増えているとのことだが、維持費を考えると、地元住民は無料にして、それ以外は入場料を取るべきと思った。素晴らしい公園だが、特徴ある公園ゆえの難しさを学んだ。

視察を終えて

高山 泰三



7月13日から15日まで、北海道内の自治体及び関係施設を訪問し、地域活性化、再生可能エネルギー、地球温暖化対策、公園整備について視察を行いました。

北広島市のボールパーク構想では、市長と担当部署が密接に連携し、明確な方針の下でトップダウンによるスピーディーかつ大胆な意思決定を行えたことが、事業成功の大きな要因であると感じました。大規模事業を前進させるには、組織内の意思統一と責任ある決断が不可欠であることを学びました。

江別発電所では、地域資源を活用したバイオマス発電の意義を確認する一方、原料となる木材の運搬に伴う二酸化炭素排出など、新たな課題についても伺い、現場でなければ得られない視点を得ることができました。

モエレ沼公園では、バブル崩壊後の厳しい経済環境の中でも、芸術性の高い一つの「作品」として公園を完成に導いた札幌市の行政と市民の努力に、深い敬意を抱きました。同時に、作品としての価値を守りながら維持管理を続ける難しさも伺い、文化芸術の意義と行政の効率性をいかに両立させるかを考える、非常に示唆に富む事例であると感じました。

今回の視察で得た知見を、文京区における迅速な意思決定、環境施策、文化政策及び持続可能な施設運営の検討に生かしてまいります。

視察にご協力いただいた、各市役所、および関係者各位に改めて感謝申し上げます。

北海道北広島市、江別市、札幌市を視察して

板倉 美千代



北広島のまちは、1884年に広島県から1村形成を目指し25戸103人の入植が始まりで、札幌市に隣接しながらも緑豊かな自然環境に恵まれ、ほっとする空間が広がるまちでした。

「ボールパーク構想推進事業」は、32haの広大な土地に北海道日本ハムファイターズのホーム球場の他農業学習施設、宿泊施設等の併設、さらに2042年まで段階的に整備する計画とのこと。計画段階で「無謀な挑戦」と言われたが、努力が実り着々と実現に向け進んでいました。

バイオマス発電は、以前は廃棄されていた間伐材や林地残材とパーム椰子殻を燃料として資源を無駄なく有効活用でき、化石燃料や原発に依存しない発電として大いに発展が期待されますが、燃料のパーム椰子は輸入で、産地である熱帯雨林の破壊による気候変動への影響の懸念も感じました。

江別市の14歳以下の年少人口増加数は全国20位とのこと、市が取り組む研究学園都市に加え農業・酪農・工業施設、充実した移動手段や雄大な自然環境が大いに役割を果たしていると思われました。

地球温暖化対策の取り組みでは、様々な再生可能エネルギーを導入し、中でも太陽光発電は「垂直両面パネル」に注目でした。積雪した雪の反射光や拡散光をとらえやすく、大型農業機械でも作業しやすいなどの利点は、様々な地域で活用でき、広がっていくことを期待します。